

美術関連資料のアーカイブ構築と活用

2021 年度活動報告

「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」は、2017 年以降、山下晃平をプロジェクトリーダーとして写真資料の分類と整理を継続してきた。写真資料の確認作業を進め、井上隆雄本人の分類を基準とする資料目録の作成は 2020 年度に完了した。同時に、インド・ラダックの仏教壁画および関連する撮影画像に焦点を絞り、ポジフィルムでのデジタル化とデータベース化を進めてきた。

共同研究者として 2018 年 9 月から関わった筆者はこの写真を観て、日本画表現の一つである模写の資料となり得ると感じ、胸躍するような気持ちを抱いた。被写体を記録した写真というのは、視覚芸術の一つの形である。井上隆雄が壁画を捉えて、記録し、伝えようとした眼差しそのものと考え。その写真を美術表現的に解釈し、様々な調査の知見と合わせて芸術実践することは、新しい視覚芸術を生み出すことと考える。芸術資源を実践に展開することはアーカイブとして意義深い。

また、この写真資料は美術表現研究に限らず、仏教図像学や文化史的観点においても研究対象になりうる。原資料の保管と並行してのデジタル化は、画像の保全と多くの人の目に触れる機会につながり、利活用の可能性がみえてくる。

これまでの研究活動を総括して「井上隆雄「インド・ラダック仏教壁画」資料展 ―蘇る天空の密教図像―」（2021/3/23～3/28 京都市立芸術大学小ギャラリー）を開催した。前年度の取り組みであるが、本年度の研究活動につながるものであったので紹介する。この資料展は、井上隆雄の写真資料のアーカイブ実践自体を紹介するという趣旨で、原則として網羅的、総覧的に資料を併置した。資料に関する説明（キャプション）は、資料の規模が分かるように数量を表示した。そして、利活用の一例として井上隆雄写真から制作した模写作品を展示した。この資料群とアーカイブ実践そのものを提示することで、来場し、写真資料に対峙した鑑賞者は個々に感じるものがあったと推察する。来場者の中で、我々と共感する研究者たちとの出会いは本研究を次の段階へと進めるきっかけになった。



「井上隆雄「インド・ラダック仏教壁画」資料展」会場

2021 年度からは、筆者がプロジェクトリーダーとなり、ラダックの撮影画像のデータベース化の継続に加え、ミャンマーのバガン遺跡壁画の撮影画像の分類整理を始めた。岡田真輝（本学嘱託職員）が中心となり、井上隆雄が「BAGAN」「BURMA」とラベルを貼った箱に収納された 7902 枚（ポジ・ネガ含む）の整理と通し番号付け、目録作成を継続中である。

さらに、京都市立芸術大学特別研究助成を受けて「井上隆雄撮影の仏教壁画のアーカイブ実践による仏教美術研究ネットワークの構築」を立ち上げ、本プロジェクトと連動して活動している。この研究会は、加須屋誠（仏教美術史/京都市立芸術大学）、菊谷竜太（インド・チベット学/京都大学白眉センター）、末森薫（文化財保存学/国立民族学博物館）、寺井淳一（歴史学・バガン研究/東京外国語大学）、檜山智美（西域美術図像学/京都大学白眉センター）、丸川雄三（連想情報学・コンピューターサイエンス/国立民族学博物館）、山下晃平（近代美術史・アーカイブ研究/京都市立芸術大学）を主メンバーとし、其々の立場から写真資料に対しての講演、井上隆雄写真資料のアーカイブを考察する意見交換を積極的に行っている。これまでの研究会の内容は以下の通り。

4 月 24 日 第 1 回「井上隆雄写真資料アーカイブ実践について」（正垣雅子/山下晃平）

7 月 14 日 国立民族学博物館写真資料収蔵庫見学、DiPLAS 採択者説明会

8 月 24 日 第 2 回「既知の素材からどのように未知なる対象を比定しうるかーアルチ三層堂「成就者肖像集」をめぐる現状と課題ー」（菊谷竜太）

9 月 29 日 第 3 回「バガン遺跡概要 井上隆雄写真資料の整理および利活用に向けた遺跡紹介」（寺井淳一）

10 月 27 日 第 4 回「“うつす”ということ 壁画の場合」（正垣雅子）

11 月 24 日 第 5 回「美術研究資料のデジタルアーカイブの活用と発信」（丸川雄三）、「地域研究写真のデジタル化・データベース化と研究への活用 DiPLAS プロジェクトの経験」（石山俊/国立民族学博物館）

また、6 月には、国立民族学博物館による科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム 地域研究画像デジタルライブラリ DiPLAS 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」に、井上隆雄写真のラダックとバガンの仏教壁画写真を壁画研究のリソースとして申請、採択を受けた。これによって、ラダックの仏教壁画のデジタル化画像 1744 枚、バガンの仏教壁画のフィルム 2826 枚のデジタル化とデジタルデータベースと画像検索システム構築の支援を受けることになった。井上隆雄写真アーカイブの公開の範囲については検討を要するが、多くの人が見やすい形となるデジタルアーカイブの構築は大きな進展であると考えている。

井上隆雄写真資料が多くの人を惹きつけたのは、井上隆雄が撮影する時の眼差しへの共感であり、細かく記述された取材ノートから滲み出る撮影の情熱への敬服であろう。この写真資料がどこかの倉庫で眠ってしまうものではなく、動的な芸術資源としての可能性を感じている。

正垣雅子（美術学部准教授）

「森村泰昌アーカイブ」では、公開中のデータベースの活用につとめ、美術館学芸員など研究者へ情報を提供するとともに、データベースに収録されている 1980 年代以前の情報についても探索を続け、現在構築中の京都市立芸術大学総合基礎実技アーカイブ収録予定のデータを調査し、本学入学当初の森村泰昌関連の画像や文書資料について閲覧した。初年度教育の重要性をふまえ、実験的に構想され、開始された総合基礎実技（1971 年当時「共通ガイダンス」）の姿と、森村のその後の目覚ましい活躍の広がりとはオーバーラップする。

加須屋明子（美術学部教授）